



Title	ベンヤミンからのイメージ論 : 生誕一三〇年を記念して
Author(s)	柿木, 伸之
Citation	形象. 2024, 6, p. 11-13
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/95362
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

特集論文

ベンヤミンからのイメージ論

—— 生誕一三〇年を記念して

ヴァルター・ベンヤミンの思考は、しばしば「イメージ（形象、像）の思考 Bildenken」と称される。彼の思考がイメージをその可能性へ向けて問いながら、それ自体イメージを媒体に繰り広げられるためである。それをつうじて彼は、『ドイツ悲劇の根源』のアレグリー論が示すように、言葉が「文字像 Schriftbild」という独特のイメージとして表現の媒体と化す次元への視野を切り開いた。他方で「技術的複製可能性の時代の芸術作品」などでベンヤミンは、テクノロジーの日常生活への浸透による人間の知覚経験の変化を踏まえつつ、知覚の媒体となるイメージが技術的に産み出されることの可能性と危険を検討している。そのような彼の思考を貫くのが、聖書が説く偶像の禁止にも通じる仮象批判である。

ベンヤミンの生誕一三〇年（二〇二二年七月一日）を記念して二〇二三年三月四日、西南学院大学学術研究所にてハイブリッド形式で開催された形象論研究会のシンポジウム「ベンヤミンからのイメージ論」は、このような特徴を具えた彼の「イメージの思考」を多角的に検討する場となった。本特集はその成果を示すものである。パネリストとして、ベンヤミン研究を進展させるうえで刺激的な研究報告を届けてくださった田邊恵子氏と村上真樹氏に心より感謝申し上げる。本特集には両氏の論稿とともに、テーマへの導入として行なった報告を基にした拙稿が収められている。形象論研究会のメンバーをはじめ会場で、あるいはオンラインで熱心に議論に参加してくださった方々にも併せて感謝申し上げたい。

田邊氏の論文に関してまず特筆されるべきは、それが刊行が進みつつあるベンヤミンの『作品と遺稿』批判版全集 *Werke und Nachlaß, Kritische Gesamtausgabe*』にもとづく研究——それは徐々に日本語でも発表されつつある——の成果を示している点である。その『一九〇年ごろのベルリンの幼年時代』の巻は、彼が亡命生活のなかで書籍化にこだわったこのエッセイ集の改訂過程を示しているが、それを検討すると、最後にまとめられた稿本に加わった二篇のエッセイを貫く月光が、亡命者の心の居場所ともなるもう一つの世界を照らし出しているという。その出来事の媒体となる言葉を研ぎ澄ますなかでベンヤミンは、破局の連続としての歴史と対峙しながら、みずからの故郷喪失を掘り下げていったにちがいない。

こうして自己批評としても展開される仮象批判を、思想的な視座から検討したのが村上氏の論文である。それはベンヤミンの仮象概念を美学の系譜に位置づけながら、彼が『ゲーテの「親和力」』において、仮象が美を輝かせるのを静止させる「表現をもたぬもの」の概念を導入していることの意義に新たな光を当てる。仮象の静止と時の中断を同時にもたらすこの崇高なものは、イメージの亀裂として突きつけられるという。後年のベンヤミンは、そこに革命的な歴史の構成の契機を見て取りながら、イメージを救済の媒体として捉え返そうとしていた。拙論はこうした問題意識を、その起源から浮かび上がらせようとする試みである。本特集がイメージをめぐる批判的研究の展開の契機になることを願ってやまない。

「柿木伸之」